



## BOOK REVIEW

# 安倍政権の大戦略： 強い日本を、取り戻す。

蔡錫勳

翰蘆図書出版（台湾），2019年8月出版，616頁



立教大学 アジア地域研究所 特任研究員

／韓国・檀国大学校 日本研究所 海外研究諮問委員 高橋 孝治

バブル経済崩壊後の日本は停滞を続けてきたが、安倍晋三政権は「日本を、取り戻す」をマニフェストのカバータイトルに掲げている。このため、安倍晋三政権は、これまでの日本の政権とは異なる戦略を用意しているようである。このような安倍晋三政権の戦略を読み解くのが、蔡錫勳『安倍政権の大戦略：強い日本を、取り戻す。』（翰蘆図書出版〔台湾〕，2019年。以下「本書」という）である。本書は、台湾において日本語で出版された本である。本書の筆者である蔡錫勳は、台湾人でありながら日本の東北大学大学院経済学研究科で修士号および博士号を取得し、現在は台湾の淡江大学日本政経研究所の所長を務め、日本企業の経営戦略、日本の大戦略を研究領域とし（本書 p. 617。以下、ページ数のみ記す）、既に日本語での著作を多く持つ日本ウォッチャーでもある。なお、台湾では「研究所」とは「大学院」を意味するため、「研究所所長」は「研究科長」に相当する。

p. 9によれば「大変革時代に鑑み、安倍政権は三本の矢に象徴される経済政策『アベノミクス』を提唱し、円安・株高へと導いたが、本当に『強い日本を、取り戻す』ことはできるのか。本書はこの大変革を正しく理解するために、アベノミクスだけを論じるよりも、『強い日本を、取り戻す』ための安倍政権の大戦略を縦横無尽に見極めるものである」。これに対し、本稿は、本書について以下、縦横無尽に見極めていくこととする。

本書の構成は以下の通りである。

## 序論

第1章 日本の第三次大戦略

第2章 経済再生

第3章 挑戦（チャレンジ）

第4章 海外展開（オープン）

第5章 創造（イノベーション）

第6章 アベノミクス 2.0 の新三本の矢

第7章 文化強国

第8章 外交・安全保障再生

第9章 日米中「三国志」の新時代

結論 安倍版富国強兵

以下、各章の内容を簡単に見ていく。

第1章は、第1次安倍晋三政権の構想は「美しい国」であったが、第2次政権にはそれが「強い日本」へ変化したと指摘し、その実現のために「経済再生」に力を入れているとする。さらに、「強い日本」は、大日本帝国、世界第2位経済大国に替わる安倍版富国強兵の新たな国家像であると指摘する (p. 43)。

第2章は、バブル経済からバブル崩壊までという日本経済の概況とアベノミクスについての解説をしている。そして、「安倍政権は数々の『好循環』を創造しようとしている」と述べている (p. 100)。

第3章は、アベノミクスにおける成長戦略について解説している。その中では特に原発などのエネルギー政策や労働政策について深掘りしている。

第4章は、日本の海外展開の歴史とTPPなどの海外展開の現在地について解説している。特に pp. 157~163 は、日本の海外展開の歴史を、明治維新から大日本帝国の国家像への富国強兵の時代 (1853~1945年)、戦後復興から経済大国やジャパン・アズ・ナンバーワンの国家像への富国強兵の時代 (1945~91年)、強い日本の国家像への第3の開国の安倍版富国強兵の時代 (1991年~) と区分している。

第5章は、日本の電機産業やロボット産業の革新について解説している。そして、第6章は、アベノミクスの新三本の矢について解説している。この新三本の矢導入のきっかけについては「安保法案を通す過程で国民の反感を買ったために、経済最優先で得点を稼ぎたい意図がある」と述べる (p. 280)。そして、「新三本の矢は手段ではなく目指すべき目標である」と述べ (p. 293)、「一億総活躍社会がスローガン倒れにならないためには、保育・介護サービスを担う人材の確保が大きな課題で」、現状の打開がされなければ出生率の向上や介護離職の減少は望めないとまとめる (p. 294)。

第7章は、クールジャパン政策や観光立国政策、日本の「食の魅力」について解説している。そこではモスバーガー、ミスタードーナツといった日本のファーストフード店の詳細な説明もされている。

第8章と第9章では、安倍晋三政権の外交・安全保障政策について解説されている。そして、結論では、安倍晋三政権下の一強多弱体制は、「千載一遇の機会」であると述べ (p. 576)、「米軍との日米同盟及び中国との経済連携の大きなうねりの中で、安倍政権は『強い日本を、取り戻す』ための戦略を考えている」とまとめる (p. 601)。

本書は、「強い日本」という言葉を「経済再生し、暮らしを再生させる」ことと捉えている (p. 38)。それ自体は「正しい」といえるであろうが、安倍晋三政権では消費税増税などにより格差拡大が加速し、市民の「暮らしを再生させる」にはほど遠いように見える。しかし、それにもかかわらず本書は基本的には安倍晋三政権の施政方針を安倍晋三政権の言葉をそのまま受け入れて執筆されている。もっとも、一部のみではあるが、例えば「第1の矢の大胆な金融政策と第2の矢の機動的な財政政策だけではマネー・ゲームにとどまり、真の経済再生を実現させることは難しい。第3の矢は音だけの鎗矢になる恐れがあるため、第3の矢の成長戦略の加速・進化こそが本番で

あるが、前途多難である」(p. 101), 「一般国民に好景気の実感はない」(p. 584) など、アベノミクスへの疑義も言及している。この意味では本書は、安倍晋三政権の施政方針をそのまま受け入れているのか、それとも批判しているのか評者には分からなかった。また、安倍晋三政権への直接的な批判ではないにしろ、遠回しの批判とも読み取れる表現に、「NHK 世論調査によると、『他の内閣より良さそうだから』は、安倍内閣を支持する主な理由である」(p. 576), 「『勝って驕らず、負けて腐らず』、『謙虚にして驕らず』という言葉がある。自然界では弱き者が強き者に捕食される。絶対的権力は絶対に腐敗する」(p. 576) との言い回しもある。

しかし、本書は、基本的には安倍晋三政権の政策内容を紹介し、その背景知識を説明するにとどめており、筆者の安倍晋三政権への直接の評価に関する記述は見られない。この点から、本書は、「研究書」ではなく、安倍晋三政権下の日本政治を理解するための「資料集」として位置づけられるのではないかと考えられる。筆者が台湾・淡江大学「日本政経研究科」の「研究科長」であることから、日本の政治経済を研究しようとする大学院生が修士論文などの執筆時に、安倍晋三政権の政策を確認する際などには、本書は非常に有用な資料集となろう。その意味では、台湾式中国語で執筆されていた方がより多くの台湾人にとって有用な資料集となったかもしれない。しかし、そこは「日本語で日本政治を理解する」ということを大学院生に求めているのであろう。もっとも、この表現と矛盾するようであるが、安倍晋三政権に対する意見が読み取れない「資料集」という点から、本書は筆者が「日本ウォッチャー」として執筆したものともいえる。その意味では、日本ウォッチャーであり、日本政経研究科長という2つの顔を持つ筆者であるがゆえに執筆できた書籍といえるであろう。

ところで、本書は明治期やバブル経済期などとの連続性や日米貿易摩擦の歴史 (p. 192) など、現在の日本政治を理解するのに必要な背景も丁寧に説明している。この点は、安倍晋三政権の政策の背景を理解したい日本人にとっても必要な知識をまとめていて有用であるといえる。また、安倍晋三政権の政策については、首相官邸のウェブサイトから大量の引用をしている。これらの引用元はいつかは消えてしまうであろう。そのため、後の日本人にとっても、「かつてこのような方針をとっている総理大臣がいた」ということを活字で残している貴重な資料といえる。

また、日本政治を理解するのに必要な背景知識のみではなく、筆者の日本ウォッチャーとしての知識の深さを見せつけるかのように、その他、本筋とは関係ない様々な日本に関する蘊蓄が本書には登場する。例えば、p. 21 は以下のように記す。「場の『空気』は、日本的失敗の本質に迫るためのキーワードである。『空気』の代わりに、『村度』という言葉がある。風とは『空気』の流れのことである。『風林火山』は、戦国時代の名将・武田信玄が『孫子の兵法』の第7章『軍争篇』の一節を学び、旗印に掲げた有名な語句である」。このような現代の日本政治に直接関係ないものの、他人に話したくなるような日本に関する様々な雑学も知れるところも本書の魅力かもしれない。

もっとも、このような蘊蓄が随所に散りばめられているためか全 616 頁という一読するにもかなりの労力を必要とする大作であることも事実である。しかし、日本語で書かれているため、日本人にもやはり一読してほしい書といえる。